

2024年3月10日(日) / 説教者：神谷武宏

説教：「開かれよ」

聖書：マルコによる福音書7：31～37

イエスは一人の人に向き合う。その方は、耳が聞こえず、話すことのできない人であった。ここは癒す(治してあげる)という物語になっているが、どのように見ていくかは大事になる。

この耳の不自由な人は、人々がイエスのところに連れてきたようだ。そして、「その(人の)上に手を置いてくださるようにと(イエスに)願った」わけだが。人々が連れて来たこの「人々」とは、耳の不自由な人の友達ということかと思う。「イエス様が、この町に来ているそうだよ。イエス様に触れていただこう。きっと癒してくださるよ！」という感じかと思う。

するとイエスは、この人だけを群衆の中から連れ出し、指をその両耳に差し入れ、それから唾をつけてその舌に触れられた。何故、指をその人の両耳に入れる必要があったのか？唾をつけてその舌に触れる必要があったのか？イエスはこれまで誰も触れることのなかったと思われる耳に、舌に触れる。この行為は深い愛に満ちた、慰めの行為であったのではないか。そしてイエスは「この人だけを群衆の中から連れ出し」たとある。これは「私はあなたとあなただけと向き合いますよ」と言うこと。あなたの全てと向き合うということである。指が両耳に届く距離、もうくつつくぐらいの距離で。

それからイエスは「エッフアタ」と言う。これは当時の庶民の言葉であったアラム語。意味は「開け」。何故、「エッフアタ(開け)」なのか？「治れ」とか「良くなれ」とかではないのか。ここで「エッフアタ」という言葉が記されているのには、ただ単に癒しのこと、治療のことが目的では無いということになる。イエスは、一人の人が、耳が聞こえない、話せないという障がいのゆえに、社会の中で閉ざされた思いにさせられてきた中であって、「開かれていいんだ、社会の中で堂々と生きていいんだ、開かれよ！」というイエスの思いがそこにあるのかと思う。

そしてこの「エッフアタ」は、私たちにも語られている言葉であることを受け取っていきたい。耳が聞こえない、話せない人と共に生きる時、社会の中で小さくされた者の側に向き合う時、私たちの側が、開かれず、閉ざしているということはないか。開かれるべき者は、私たちの側で、健常者を中心としている社会の側にあるのではないか。「エッフアタ」、「開かれよ」と全ての人に、閉ざしてしまっている社会にイエスの言葉があることを覚えたい。(神谷)